

帰正反本きせいはんほん

千葉県千葉市 白葡萄

時下、益々御清祥ごせいしやうのことと存じます。

さて、後期中間考査の学習状況等につきましては、別途通知表でお知らせしましたが、評価及び欠課時数並びに単位修得認定について、下記の通り憂慮すべき状況があります。

本校においては、評価が30点未満の場合にはその科目の単位修得が認められません。また、出席時数が授業時数の2/3に満たない場合はその科目の履修が認定されません。つきましては、学校において鋭意指導してまいります。御家庭におかれましては、家庭学習の習慣化、お子様の生活リズムの立て直しなどを御指導くださるよう、お願いいたします。

数I 素点 6点

英語コミュI 素点 27点

それは突然、我が家のポストに投函されていた。封を開けた母が小さな悲鳴を上げて、この悲しい知らせを深刻な顔で告げてきた。この春から高校生となった私は、特に何も考えていないながらも毎日学校には通っていた。授業を真面目に受けるのは面倒臭いが平和で穏やかな日々だった。まずいな。何でこんなやつかいな手紙が届くんだらう。27点って、6点って。そもそも、何で

高校は義務教育じゃないんだらう。さらに学校に通うのが面倒になるではないか。母は「頼むから高校までは卒業してね。」とオロオロし、父は「本当にこういうの来る人いるんだ。」と感心していた。妹など絶対言えない。

確かに思い返すとテスト期間中の私はとても勉強をしていたとは言いがたい。ゲームをしたり、漫画や小説などの知的文化との戯れを少しばかり楽しんでそのまま寝てしまったかも知れない。まあ、順当な結果が返ってきたのではないだろうか。

だが、嫌だなあ。机に向かって、興味の無い何かを覚えるという行為はとてつもなくつまらないのだ。数学の公式はいつまで経っても覚えられないし、何でそんなに複雑にするのかがまず理解できない。正弦定理を利用して、障害物などで直接測ることができない2つの場所の距離を計算で求める？いつか必要になることはあるのだろうか。英単語は4文字までしか頭に入っていない。5文字以上になると1文字目以降は桜の花びらのようにはらりはらりと記憶から舞い散ってしまう。ああ、どうしよう。

でも、日々は過ぎて行く。成績不振の通知が届いてからも一向に勉強する気にはならなかった。どうしてかはわからないが、焦ってはいっても勉強をしたいという気持ちにはならないのだ。勉強をしなければどうなるかは理解できるが体が動かない。状況と自分の状態の不一致が続いていく。このモヤモヤとした気持ちはどうしたら良いのだ。そもそもこんな気持ちのまま勉強しても身に付かないのでは無いか。どうしよう、どうしたらいいのだ。うーん。

そうだ、旅に出よう。こんな現実からは一度脱出した方が良いのだ。

早速、旅に出る為の資金をダメで元々と思いなながらも母にねだってみた。すると母は何を誤解したのか「良いね、じゃあこれにしない？前からトロッコ列車に乗ってみたかったの。」と言い出した。そのまま、あれよあれよという間に小湊鐵道の房総里山トロッコを予約し家族全員で休日の朝、五井駅へと向かうことになった。

五井駅に着くと、駅員さんが改札とホームを何度も行き来しながら家族と一緒に座れるように予約した席へと丁寧に案内してくれた。ホームに降りると、真っ黒に光る機関車がお目見えした。なるほど、とてもレトロな姿だ。座席は木でできた公園のベンチといった風情で旅の気分を盛り上げてくれる。出発する際、駅員さんや係の人が「いつてらっしやーい。」と両手を振ってくれた。

トロッコ列車というものは、どうも通学で使う様な電車に比べてゆっくり走るらしい。車内は早速弁当を開ける人がいたり、ガラス張りになった天井から空や線路を覆う木々が見えたりした。途中で停まる駅も小さな木造の駅舎に手書きの駅名が書かれた看板が立っておりなかなか趣があった。父母は「あ、アケビ！」「あ、カラスウリ！」と通り過ぎていく自然を発見しては声を上げて喜んでいった。車窓からはカメラを構えた人や、列車に向かって手を振る現地の人を多数見ることができた。

その日向かったのは高滝駅という所の美術館で、芸術を鑑賞しようという大義名分を得ていたが、本当は美術館の近くにうまい

蕎麦屋があると情報を得たからであるのは知っていた。そもそも、芸術を鑑賞するにしておかかきいのである。父は在宅勤務続きで髪もひげもボサボサ、寒かったのかフサフサの毛皮がフードについた上着を羽織っており、どう見ても雪山の遭難者に見えるてしまう。一方で妹は基本的に何事にも無関心だ。外では優等生を演じているが、家ではとても冷たい。このドライモンスターの心を動かす芸術がもしあるのならば一度はお目にかかりたいものである。そして母に至ってはとても芸術鑑賞に結びつかない。いつも会社から走って帰って来るだけでも引いているのに、ある日帰りにバナナを買うよう頼んだ所、汗だくの格好に手づかみでバナナの房を持ち帰って以来、私からすれば母は「ゴリラ」という認識でしかない。この芸術とはかけ離れた個性的な集団で一体何をどうしろと言うのだろうか。

生き生きとしたウスバカゲロウの水上オブジェがある高滝湖に着いた。そこらに生えている草木について母と話をしながら美術館を目指した。大体忘れてしまったが、一つだけ「スイバ」という草は覚えた。ほうれん草の葉に似た葉を持ち、チュウチュウと吸うとほんのり甘酸っぱい味がするのだという。母が幼い頃、大叔母と遊んでいる時に教わって、よく茎を吸っていたそうだ。そうこう話しているうちに目的の市原湖畔美術館にたどり着いた。

美術館では沢山のキラキラとしたガラス玉で覆われた綺麗な鶏の立体作品に迎えられた。色々な表現活動をしながらかんぱんをしてる写真、絵の具をぐちゃぐちゃに塗っているように見える作品、通過している自分の影が作品の一部になるもの、色々な

スケッチや薙弱したやくみたいな石など、「へえ。」となるものから「？」となるものまで様々な展示を見た。父は真つ黒な廃油が満タンに入った大きな鉄製のオイルプールを見て「温泉みたいだな。」と感心していた。妹はオイルプールを見て「黒いな。」と一言呟いた。ゴ：母はオイルプールを見て「飛び込んでみたいな。」などと言っている。そんなことをしたら油を辺り一面にぶちまけてしまうではないか。案の定、この集団は芸術鑑賞に向いていなかった。改めてその事実を実感していると、だんだんお腹が空いてきていることに気が付いた。母が、「お腹空いたねえ。そろそろお蕎麦食べに行かない？」と提案してきた。そうだ、うまい蕎麦屋が待っているのだった。と、言うことで我々は蕎麦屋に向かって歩き出した。

高滝湖は空の色を映し出し一面に真つ青な視界を作っていた。その真ん中を横断するように真つ赤な橋が架かっており、釣りを楽しむボートを眺めながら橋を渡った。高滝湖はワカサギの釣りスポットでもあるらしい。よく見るとワカサギ釣りのためのドームもあった。確か以前、「メヒカリ」という魚を揚げたそばから次々に妹が食べ、家族全員分を食べてしまったという事件があった。釣りたてのワカサギもクセがなくおいしいと聞いたことがある。カラッと揚げたワカサギはきつとサクサクの衣にふわふわの柔らかい白身でさぞかしうまいのであろう。次にここに来る時はワカサギを釣りに来よう。そう思っているとお目当ての蕎麦屋が見えた。が、同時に店内に入るのを待っている行列も見えてしまった。

待つか、と思ったその瞬間にゴリ：母は「こっちにもお店あるよー！」とスタスタと歩いて行ってしまった。恐らく並んで待つほど空腹に耐えられなかったのだ。食欲までゴリラなのか。残る3人は為す術も無くそれに続いた。たどり着いた先にあったのは「高滝ダム憩いの家」と書かれた木の看板と「いこい」と書かれた暖簾のれんのかかる手作り感あるほっこりとした休憩所だった。まず、靴を脱がなくても入れるスペースもあると案内されたので遠慮無くそちらを使わせてもらうことにした。湖の上の橋を渡ってきた際、風で体が冷えていたためみんなでしょうゆラーメンを食べることにした。

待っている間、父母が先ほどの美術館の展示について話をしていたが、店内では常連と思われる客が若女将にワカサギ釣りの成果を話していた。そっちを何となく聞いているうちに、サービスだというお通しが運ばれてきた。

お通しとはいえ、ニラ玉、もやしの和え物、春菊のナムルと3品も皿に乗っている上、地元の人に分けてもらったという柿まで付いていた。すぐさまテーブルの上ではお通しがトレードされ、柿は全て妹へ、私と妹のもやしの和え物は父へ、春菊のナムルは全て母の皿へと集約されていた。「うまいな。」と父は感心し、妹は無表情のまま柿をべろりと平らげ、ゴリラはモシヤモシヤと春菊を食べながら「ビールは無いのかな。」とニコニコしていた。そうこうしているうちに湯気の立つラーメンが運ばれてきて、家族みんなで黙々と食べ始めた。オーソドックスで懐かしい醤油ラーメンといった感じでシンプルながら冷えた体に染み渡る美味

しきであった。

食することに集中し家族の誰もしゃべらなくなったため、また店内の様子が耳に入ってきたのだが、若女将はゆっくりながらもハキハキと楽しそうに会話をしている。人の良さが雰囲気からもじみ出ていた。素晴らしい接客である。うまい蕎麦には有り付けなかったが、我々はうまいラーメンを気持ち良く食べることができ朗らかな気持ちで店を後にすることができた。

てるてる坊主を吊してきただけあって空は晴れ渡り、良いお店に入れたのもあって私はとても良い気分だった。高滝：自然も人もとても良いところだった。また来よう。だが、急にハツとなった。これではただの楽しい日帰り家族旅行ではないか。現実逃避の為の旅ではなかったのか。

せめて何か得るものは無かったか。必死に旅を思い返してみた。ほとんど食べることを考えていた母：ではなく、乗客が無事に出発できるように一所懸命に送り出してくれた五井駅の駅員さん、芸術鑑賞で見たキャンプをする写真の中の人々、ワカサギ釣りを楽しむ人、合間で暖を取りながら釣りの成果を話す人、お店に来る人を暖かく楽しく迎える若女将。みんな生き生きとしていた。なぜなのか。そうか、みんな好きなことをしているから楽しいのだ。確かに楽しいだけではなく、見えないところで辛いこともあるだろう。だが、好きなことだから辛いことがあったとしても続けられるのではないだろうか。では、自分に置き換えたとして、まず好きではない勉強を自分の中では曖昧な理由で無理矢理やるう

としたから続けられなかったのではないだろうか。

原点に戻って考え直してみると、まず勉強を抜きにしても高校生活そのものは楽しい。それにその楽しい生活を続けて、無事に卒業できればその先では好きなことに挑戦する機会ができるし、進学やそれを仕事にすることを選択できるようになる。そのためには例え苦手だとしても勉強をすることは必要なのだろう。

もう一つ、真つ黒な廃油が張られたオイルプールを思い出した。ピンと張られた深い黒の一面は、周囲のものをそのまま映し出しもう一つの世界を作り上げていた。私は今、16歳だ。色々なものを取り込み、一つだけではなく沢山の世界を作ることができているのではないだろうか。「勉強」という苦手なものに取り組むのではなく、「生きていくための知識・見聞」を増やすことを目的に学んでいけば良いのではないかと思えてきた。あんなに理解しがたい正弦定理だって、遠くに見える星の距離を求めることができるといふから、いつか宇宙を旅する時代が来た時に使ったり、思いつきもできないことに役に立つかも知れないのだ。

まだ見ぬ世界は想像も付かないほど沢山の美しいもの、醜いもの、大きなもの、小さなもの、甘いもの、苦いもの、楽しいもの、悲しいものなど色々なものがあるのだろう。私はその中でいつでも、好きなものを見つけることができるように頭の中を準備しておく必要があるのだ。今はまだ吸収すべきものが足りず、学校からも警告の通知をもらうような惨状だ。だが、命を失ったり、生きていけない状況になったわけではない。それらを探しに出る頃には、今の私の悩みはとてつ小さなものに思えてくるだろう。

まずできることは、次回のテストで赤点を回避することだ。考
えがまとまった。旅に出てみるものだ。私は決意表明をすべく、
冒頭の学校からのお知らせに返事を書くことにした。

一時下、益々御清祥のことと存じます。

さて、後期中間考査の学習状況等につきましましては、通知表で表
記されたとおり日頃の成果がしっかりと点数に表れております。
評価及び欠課時数並びに単位修得認定について、憂慮させてしま
う状況になってしまいました。

貴校においては、評価が30点未満の場合にはその科目の単位
修得が認められないと重々承知しております。また、出席時数に
ついては、健康優良児のため御安心いただければと思います。つ
きましては、家庭学習において生きていく上で大切なことを吸収
できるよう鋭意精進します。温かく御指導くださるよう、心より
お願いいたします。

さあ、やるか…。